

市有地売却可能性調査業務委託契約書(案)

八戸市（以下「委託者」という。）と〇〇〇〇（以下「受託者」という。）は、市有地売却可能性調査業務について、契約を次のように締結する。

（総則）

第1条 委託者は、受託者に対し、次の業務（以下「委託業務」という。）を次条以下の約定により委託することを約し、受託者はこれを受託した。

- (1) 業務名 市有地売却可能性調査業務
- (2) 業務内容 別紙「市有地売却可能性調査業務仕様書」（以下「仕様書」という。）のとおり

（業務の実施）

第2条 受託者は、仕様書に基づき、委託者の指示に従い委託業務を実施するとともに、委託業務に関する諸法令を遵守しなければならない。

（契約期間）

第3条 この契約の期間は、契約締結の日から令和8年7月31日までとする。

- 2 委託者の都合により、この期間を延長又は短縮することができる。

（委託料）

第4条 委託者は、受託者に対し委託業務の実施に要する費用（以下「委託料」という。）として金〇〇〇〇円（うち、消費税及び地方消費税の額〇〇〇〇円）を支払う。

（費用負担）

第5条 委託業務の実施に必要な経費については、仕様書に定めるものを除き、受託者の負担とする。

（委託料の変更等）

第6条 受託者は、一般経済情勢の変動により燃料及び労務賃金等に増減を生じた場合にあっては第1条の業務内容又は第4条の委託料を変更することはできない。ただし、予期することのできない経済情勢の激変により委託料が著しく不相当であると認められるに至ったときは、委託者と受託者とが協議の上委託料を変更することができる。

（業務の検査）

第7条 受託者は、委託業務を完了したときは、委託者に報告し、検査を受けなければならない。

- 2 前項の報告は、書面によるものとする。

（業務の手直し）

第8条 委託者は、受託者の委託業務の実施が仕様書に適合していないと認めるときは、その委託業務の手直しを命ずることができる。この場合において、その費用は、受託者の負担とする。

（委託料の支払方法）

第9条 受託者は、第4条の委託料に係る請求書を第7条第1項の検査合格後10日以内に委託者に提出するものとし、委託者は、その受理した日から30日以内に委託料を受託者に支払う。

（権利義務の譲渡等の禁止）

第10条 受託者は、この契約によって生ずる権利又は義務を第三者に譲渡し、又は承継させてはならない。ただし、あらかじめ委託者の承認を受けた場合は、この限りでない。

(再委託の禁止)

第11条 受託者は、委託業務の全部又は一部を第三者に再委託してはならない。ただし、その内容等により、やむを得ず委託業務の一部を再委託しようとするときは、あらかじめ委託者の承認を受けなければならない。

(秘密の保持)

第12条 受託者は、次条に定めるものを除くほか、委託業務の実施に当たり知り得た秘密を他に漏らしてはならない。この契約の終了後又は解除後においても、同様とする。

(個人情報の保護)

第13条 受託者は、この契約による事務を処理するため個人情報を取り扱うに当たっては、別記「個人情報取扱特記事項」を守らなければならない。この契約の終了後又は解除後においても、同様とする。

(危険負担)

第14条 委託業務の目的物は、第7条第1項の検査に合格後、委託者に引渡しをしたときに所有権移転するものとし、受託者は所有権移転前における一切の危険負担をする。ただし、委託者の故意又は重大な過失によって損害が生じたときは、この限りでない。

(損害賠償)

第15条 委託業務の実施上受託者に生じた損害については、委託者の責めに帰すべき事由による場合のほかは受託者の負担とする。

第16条 受託者は、委託業務の実施に当たり委託者又は第三者に損害を与えたときは、委託者の責めに帰すべき事由による場合のほかは、その賠償の責めを負わなければならない。

第17条 天災その他不可抗力によって委託業務の実施上損害が認められる場合において、受託者が善良なる管理者の注意を怠らなかつたと認められるときは、委託者は、その損害の一部を負担することができる。

(委託者の催告による解除権)

第18条 委託者は、受託者が次の各号のいずれかに該当するときは、相当の期間を定めてその履行の催告をし、その期間内に履行がないときはこの契約を解除することができる。ただし、その期間を経過した時における債務の不履行がこの契約及び取引上の社会通念に照らして軽微であるときは、この限りでない。

- (1) 正当な理由なく、委託業務に着手すべき期日を過ぎても、委託業務に着手しないとき。
- (2) この契約の履行期限までに委託業務が完了しないとき、又は履行の見込みがないと認められるとき。
- (3) 前各号に掲げる場合のほか、この契約に違反したとき。

(委託者の催告によらない解除権)

第19条 委託者は、受託者が次の各号のいずれかに該当するときは、直ちにこの契約を解除することができる。

- (1) 第10条の規定に違反して契約代金債権を譲渡したとき。
- (2) この委託業務の目的物を完成させることができないことが明らかであるとき。
- (3) 受託者がこの委託業務の目的物の完成の債務の履行を拒絶する意思を明確に表示したとき。
- (4) 受託者の債務の一部の履行が不能である場合又は受託者がその債務の一部の履行を拒絶する意思を明確に表示した場合において、残存する部分のみでは契約をした目的を達することができないとき。
- (5) 委託業務の目的物の性質や当事者の意思表示により、特定の日時又は一定の期間内に履行しなければ契約をした目的を達することができない場合において、受託者が履行を

- しないでその時期を経過したとき。
- (6) 前各号に掲げる場合のほか、受託者がその債務の履行をせず、委託者が前条の催告をしても契約をした目的を達するのに足りる履行がされる見込みがないことが明らかであるとき。
 - (7) 暴力団（暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律（平成3年法律第77号）第2条第2号に規定する暴力団をいう。以下この条において同じ。）又は暴力団員（同法第2条第6号に規定する暴力団員をいう。以下この条において同じ。）が経営に実質的に関与していると認められる者に契約代金債権を譲渡したとき。
 - (8) 検査又は監督の実施に当たり、受託者又はその他の使用人がその執行を妨げたとき。
 - (9) 受託者が第三者より差押え、仮差押え、仮処分、強制執行若しくは競売の申立て又は公租公課の滞納処分を受けたとき。
 - (10) 受託者について破産手続開始、民事再生手続開始又は会社更生手続開始の申立ての事実が生じたとき。
 - (11) 受託者（受託者が共同企業体であるときは、その構成員のいずれかの者。以下この号において同じ。）が次のいずれかに該当するとき。
 - ア 役員等（受託者が個人である場合にはその者その他経営に実質的に関与している者を、受託者が法人である場合にはその役員、その支店又は常時業務委託契約を締結する事務所の代表者その他経営に実質的に関与している者をいう。以下この号において同じ。）が、暴力団又は暴力団員であると認められるとき。
 - イ 役員等が、自己、自社若しくは第三者の不正の利益を図る目的又は第三者に損害を加える目的をもって、暴力団又は暴力団員を利用するなどしていると認められるとき。
 - ウ 役員等が、暴力団又は暴力団員に対して資金等を供給し、又は便宜を供与するなど直接的あるいは積極的に暴力団の維持、運営に協力し、若しくは関与していると認められるとき。
 - エ 役員等が、暴力団又は暴力団員であることを知りながらこれを不当に利用するなどしていると認められるとき。
 - オ 役員等が、暴力団又は暴力団員と社会的に非難されるべき関係を有していると認められるとき。
 - カ 再委託契約又は委託業務を実施するために必要な物品の購入その他の契約に当たり、その相手方がアからオまでのいずれかに該当することを知りながら、当該者と契約を締結したと認められるとき。
 - キ 受託者が、アからオまでのいずれかに該当する者を再委託契約又は委託業務を実施するために必要な物品の購入その他の契約の相手方としていた場合（カに該当する場合を除く。）に、委託者が受託者に当該契約の解除を求め、受託者がこれに従わなかったとき。
 - (12) 受託者が公正取引委員会から私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律（昭和22年法律第54号。以下「独占禁止法」という。）第49条に規定する排除措置命令を受け、当該排除措置命令が確定したとき。
 - (13) 受託者が公正取引委員会から独占禁止法第62条第1項に規定する納付命令を受け、当該納付命令が確定したとき。
 - (14) 受託者が、公正取引委員会から受けた排除措置命令又は納付命令について抗告訴訟を提起した場合において、当該訴えについての請求を棄却し、又は当該訴えを却下する裁判が確定したとき。
 - (15) 受託者（受託者が法人の場合にあっては、その役員又はその使用人）が刑法（明治40年法律第45号）第96条の6又は第198条の規定に該当し、刑が確定したとき。

(16) 前各号に掲げる場合のほか、受託者がこの契約に違反し、その違反によってこの契約の目的を達することができないとき。

(委託者の損害賠償請求等)

第20条 委託者は、受託者が次の各号のいずれかに該当するときは、これによって生じた損害の賠償を請求することができる。

- (1) 第3条の契約期間内に委託業務を完了することができないとき。
- (2) 前2条の規定により、委託業務の目的物の完成後にこの契約が解除されたとき。
- (3) 前2号に掲げる場合のほか、債務の本旨に従った履行をしないとき又は債務の履行が不能であるとき。

2 受託者は、次の各号のいずれかに該当するときは、前項の損害賠償に代えて、委託料の10分の1に相当する額を違約金として委託者の指定する期間内に委託者に支払わなければならない。この場合において、違約金の額が100円未満であるとき、又はその額に100円未満の端数があるときは、その全額又は端数を切り捨てるものとする。

- (1) 前2条の規定により、委託業務の目的物の完成前にこの契約が解除されたとき。
 - (2) 委託業務の目的物の完成前に、受託者がその債務の履行を拒否し、又は受託者の責めに帰すべき事由によって受託者の債務について履行不能となったとき。
- 3 次に掲げる者がこの契約を解除した場合は、前項第2号に該当する場合とみなして同項の規定を適用する。

- (1) 受託者について破産手続開始の決定があった場合において、破産法（平成16年法律第75号）の規定により選任された破産管財人
- (2) 受託者について更生手続開始の決定があった場合において、会社更生法（平成14年法律第154号）の規定により選任された管財人
- (3) 受託者について再生手続開始の決定があった場合において、民事再生法（平成11年法律第225号）の規定により選任された再生債務者等

4 第1項各号又は第2項各号に定める場合（前項の規定により第2項第2号に該当する場合とみなされる場合を除く。）がこの契約及び取引上の社会通念に照らして受託者の責めに帰することができない事由によるものであるときは、第1項及び第2項の規定は適用しない。

5 第1項第1号に該当し、委託者が損害の賠償を請求する場合の損害金の額は、第4条の委託料から、完了分に相当する金額を控除した額につき、遅延日数に応じ、契約締結の日における政府契約の支払遅延防止等に関する法律（昭和24年法律第256号）第8条第1項に規定する財務大臣が決定する率（以下「支払遅延防止法の遅延利息の率」という。）で計算した額とする。この場合において、損害金の額が100円未満であるとき、又はその額に100円未満の端数があるときは、その全額又は端数を切り捨てるものとする。

6 第2項の場合（第19条第7号又は11号の規定によりこの契約が解除された場合を除き、第3項の規定により適用される場合を含む。）において、委託者は、同項の違約金を委託料から控除し、控除してなお不足がある場合は、受託者に請求することができる。

7 受託者は、この契約に関して第19条第12号から第15号までのいずれかに該当するときは、委託者が契約を解除するか否かを問わず、第4条委託料の額の10分の1に相当する額の賠償金にこの契約の締結の日から当該賠償金の支払の日までの日数に応じ、支払遅延防止法の遅延利息の率で計算した額の利息を付して委託者に支払わなければならない。ただし、次の各号のいずれかに該当する場合は、この限りでない。

- (1) 第19条第12号から第14号までに該当する場合であって、当該命令の対象となる

行為が、独占禁止法第2条第9項に基づく不公正な取引方法（昭和57年公正取引委員会告示第15号）第6項に規定する不当廉売であるとき又は委託者に金銭的損害を生じさせない行為であると委託者が認めるものであるとき。

- (2) 第19条第15号に該当する場合であって、受託者（受託者が法人の場合にあつては、その役員又はその使用人。以下この号において同じ。）が刑法第198条の規定に該当し、刑が確定したとき。ただし、受託者が同法第96条の6の規定にも該当し、刑が確定したときを除く。
- 8 前項の場合において、受託者が共同企業体であり、既に解散しているときは、委託者は、受託者の代表者であった者又は構成員であった者に賠償金の支払を請求することができる。この場合においては、受託者の代表者であった者及び構成員であった者は、連帯して同項の額を委託者に支払わなければならない。
- 9 第7項の規定にかかわらず、委託者に生じた損害の額が同項に規定する賠償金の額を超えるときは、委託者は、その超えた金額についても賠償を請求することができる。
- 10 第7項の規定は、この契約による履行が完了した後においても適用するものとする。
- 11 委託者の責めに帰すべき事由により、委託料の支払が遅れた場合においては、受託者は、未受領金額につき、遅延日数に応じ、支払遅延防止法の遅延利息の率で計算した額の遅延利息の支払を委託者に請求することができる。

(公契約条例の遵守)

第21条 受託者は、この契約の履行に当たり、八戸市公契約条例（令和2年八戸市条例第54号）を遵守しなければならない。

(その他の協議事項)

第22条 この契約に定めのない事項及び疑義の生じた事項については、委託者と受託者とが協議して定める。

この契約の成立を証するため、契約書2通を作成し、委託者及び受託者が記名押印の上各自1通を保有する。

令和 年 月 日

委託者 八戸市内丸一丁目1番1号
八戸市
市長 熊谷 雄一

受託者 商号（名称） ○○○○
代表者 ○○ ○○
主たる事務所の所在地 ○○市○○○-○
免許証番号 ○○○（○）第○○○号

実印

別紙

市有地売却可能性調査業務 仕様書

この仕様書は、市有地売却可能性調査業務委託について必要な事項を定める。

1 通則

受託者は、この仕様書に基づいて誠実に業務を遂行しなければならない。

2 委託業務の内容

受託者は、委託者の指示に従い、別表で定める物件について次に掲げる委託業務を行わなければならない。

(1) 売却可能性調査

- ① 境界確認及び測量要否の検討を行うこと。
- ② 工作物の撤去要否についての調査を行うこと。
- ③ 市場流通性についての調査を行うこと。
- ④ 関係図面を整備すること。
※ 登記事項証明書、公図、地積測量図は委託者から提供する。

3 その他

受託者は、委託業務を行うにあたり疑義が生じたときは、その都度委託者の指示を受けなければならない。

別表

市有地売却可能性調査業務委託物件一覧表

| 番号 | 所在地 | 地目 | 地積(m ²) |
|----|--------------|----|---------------------|
| 1 | 城下三丁目 4-24 | 田 | 129.00 |
| 2 | 大字白銀町字雷 40-4 | 宅地 | 1,056.38 |

別記

個人情報取扱特記事項

(基本的事項)

第1条 受託者は、この契約による委託事務（以下「本件委託事務」という。）を処理するため個人情報（特定個人情報を除く。以下同じ。）を取り扱うに当たっては、関係法令等の規定に従い、個人の権利利益を侵害することのないよう、個人情報の適正な取扱いに努めなければならない。

(秘密の保持)

第2条 受託者は、本件委託事務の履行により直接又は間接に知り得た個人情報を第三者に漏らしてはならない。契約期間満了後又は契約解除後も同様とする。

(派遣労働者等の利用時の措置)

第3条 受託者は、本件委託事務を派遣労働者、契約社員その他の正社員以外の労働者に行わせる場合は、労働者派遣契約書に秘密保持義務等個人情報の取扱いに関する事項を明記し、この契約に基づく一切の義務を遵守させなければならない。

2 受託者は、委託者に対して、正社員以外の労働者の全ての行為及びその結果について責任を負うものとする。

(取得の制限)

第4条 受託者は、本件委託事務を処理するため個人情報を取得する場合は、その目的を明確にし、目的を達成するために必要な範囲内で、適法かつ適正な方法により取得しなければならない。

(安全管理措置)

第5条 受託者は、個人情報について、個人情報の保護に関する法律第66条第2項の規定により準用する同条1項に規定する安全管理のために必要かつ適切な措置を講じなければならない。

2 受託者は、個人情報の取扱いを開始したときは、直ちに、個人情報の管理体制その他の前項の措置を実施し、委託者に対し、その実施状況を書面により届け出てその承認を得るものとする。これを変更した場合も、同様とする。

(目的外利用及び提供の禁止)

第6条 受託者は、委託者の同意がある場合を除き、本件委託事務の履行により知り得た個人情報を本件委託事務の目的以外に利用し、又は第三者に提供してはならない。

(複写又は複製の禁止)

第7条 受託者は、委託者の同意がある場合を除き、本件委託事務を処理するため委託者から提供された個人情報を複写し、又は複製してはならない。

2 受託者は、前項の同意を得て、個人情報の複写又は複製をしたときは、当該複写又は複製についての記録を作成し保管しなければならない。かつ、委託者が請求したときは、当該記録を委託者に提出しなければならない。

(再委託の禁止)

第8条 受託者は、委託者の同意がある場合を除き、個人情報の取扱いを自ら行うこととし、第三者（受託者の子会社（会社法（平成17年法律第86号）第2条第1項第3号に規定する子会社をいう。）を含む。）にその処理を委託又は下請させてはならない。

2 受託者は、第三者に個人情報の取扱いに係る業務の再委託をし、又は下請をさせる場合は、当該再委託先又は下請先（以下「再委託等先」という。）との間の当該再委託又は下請に係る契約書又はこれに準ずる書面に、個人情報の保護に関して受託者が負う義務と同等以上の義務を負わせる規定をするものとし、かつ、再委託等先による個人情報の

取扱いに関し必要かつ適切な監督を行わなければならない。

(返還、廃棄又は消去)

第9条 受託者は、本件委託事務を処理するために委託者から引き渡され、又は受託者自ら作成し若しくは取得した個人情報について、本件委託事務完了時に、委託者の指示に基づいて返還、廃棄又は消去しなければならない。

(教育の実施)

第10条 受託者は、個人情報の保護、本件特記事項において事務従事者が遵守すべき事項その他本件委託事務の適切な履行に必要な教育及び研修を、事務従事者全員に対して実施しなければならない。

(実地検査)

第11条 委託者は、業務に係る保有個人情報の秘匿性等その内容やその量等に応じて、作業の管理体制及び実地体制や個人情報の管理の状況について、少なくとも年1回以上、原則として実地検査により確認を行うものとする。

2 受託者は第三者に個人情報の取扱いに係る業務の再委託をし、又は下請をさせる場合は、第5条に規定する安全管理措置を講じるとともに、業務に係る保有個人情報の秘匿性等その内容に応じて、受託者自らが実地検査による確認を行うものとする。再委託先が再々委託を行う場合以降も同様とする。

(定期報告)

第12条 受託者は、委託者に対し、前各条に定める内容の遵守状況について、委託者が指定する方法に従い、3箇月ごとに報告するものとする。

(監査)

第13条 委託者は、受託者に対し、個人情報の取扱状況に関し、いつでも委託者が指示する方法により報告を求めて監査することができるものとし、受託者は、これに協力するものとする。

2 委託者は、受託者による個人情報の取扱状況に関し、委託者が指定する職員又は専門家その他の者に、受託者の事業所に立ち入らせて監査することができるものとし、受託者は、これに協力するものとする。

3 委託者は、受託者の個人情報の取扱状況が不適切であると認めるときは、受託者に対して必要な指示をすることができるものとし、受託者は、これに従わなければならない。

4 受託者が再委託等先に個人情報の取扱いに係る業務の再委託をし、又は下請をさせた場合においては、委託者は、当該再委託等先に対して第1項及び第2項に規定する監査をすることができるものとし、受託者は、再委託等先がこれに協力するよう措置するものとする。

5 受託者が再委託等先に個人情報の取扱いに係る業務の再委託をし、又は下請をさせた場合において、再委託等先の個人情報の取扱状況が不適切と認めるときは、再委託等先に対して必要な指示をすることができるものとし、受託者は、再委託等先がこれに協力するよう措置するものとする。

(事故発生時の対応)

第14条 受託者は、本件委託事務の処理に関して個人情報の漏えい等があった場合は、直ちに被害を最小限にするための措置を講ずるとともに、当該漏えい等に係る個人情報の内容、数量、発生場所、発生状況等を書面により委託者に報告し、その指示に従わなければならない。

(契約の解除)

第15条 委託者は、受託者が本件特記事項に定める義務を果たさない場合は、この契約の全部又は一部を解除することができるものとする。

2 受託者は、前項の規定に基づく契約の解除により損害を被った場合においても、委託者にその損害の賠償を求めることはできない。

(損害賠償)

第16条 受託者は、本件特記事項に定める義務に違反し、又は怠ったことにより委託者が損害を被った場合には、委託者にその損害を賠償しなければならない。